

〈論 文〉

フィジーW村の 17 年

—経済生活の近代化をめぐるインカルチュレーションと社会組織化の定点観測—

高橋 玲

Abstract This article aims to show patterns of processes of socio-economic changes in a rural village in Fiji as well as those of new strategies taken by some exceptional local people. It is analysed by means of comparing data collected in the same village in 2002 and 2019. *Inculturation*, which is generated from individual *habitus* and the *practical sense*, means that one interprets the significance of available resources newly appearing in the modernising circumstance in a field. It also means that he subjectively incorporates them to his own context. The legitimacy showing “what is the appropriate choice on an occasion” forms a shared system of values in the field. When a deviating practice obtains another legitimacy, then the practice, with the meaning of innovation, forms a creative arrangement of resources available in the field, called social organisation. We have to keep our eyes on not only the micro viewpoint from which the scenes of various practices on an occasion with disorder after the socio-economic impacts can be grasped, but the macro viewpoint from which a new form of social organisation in the field can be understood. With both viewpoints, then we can also analyse comprehensive processes in which the rural village has adapted itself to long-time environmental changes.

キーワード : ハビトゥス、インカルチュレーション、偏倚的实践、社会組織化、フィジー

1. 本稿の目的、方法、および諸概念

1.1 目的

本稿の目的は、フィジーの一農村が直面した社会経済的インパクトとそれに伴う環境変化、そして新たな環境への主体的対応過程で生じた個々人の偏倚的实践が新たな社会組織化を生み出す過程を、質的調査を用いて実証的に分析することである。個々人の多様な実践が織りなすいびつな局面の具体的描出を行うとともに、「ハビトゥス」「インカルチュレーション」「偏倚的实践」「社会組織化」などの概念を分析装置として援用し、新たな価値が社会的に共有されていく過程を明らかにする。

筆者は2002年と2019年に、フィジー共和国ナイタシリ県W村で調査を行った。約17年間でW村に生じた環境変化の諸要因には「突発的・短期的」および「漸次的・長期的」なインパクトがあったが、本稿では後者を扱う¹。

W村ではこの17年間で各種インフラ整備が急速に進展し、新たな「モノ」が村に導入された。例えば、2002年当時には無かった電気は2004年に開通した。耐久消費財を中心とする消費熱が生まれ、主婦の家事労働は軽減された。また、食材の保存法や調理法に変革がもたらされ、村における食生活の内容が変容した。利用可能な資源の選択範囲が拡大するとともに、それらの社会生活への導入をめぐる実践の多様な型がみられた。

他方、携帯電話とSNSの普及、そして高規格道路の整備による村へのアクセス向上は、W村に新たな「状況」をもたらした。村と首都のスヴァとの交流は、心理的にも物理的にも密になった。また、主要な商品作物であるタロ芋の物流事情も変容した。村人の中には、こうした環境変化にうまく対応して新たな型の実践を生み出す者もいれば、旧来の慣行をそのまま続ける者もいる。

本稿では、長期的に進行してきた環境変化を媒介としながら、村人の諸実践に表象される彼らの価値体系と、それらの再生産のありようを明らかにする。再生産の諸相には、旧来の伝統的価値が新たな意味を纏いつつ継承されるさまを含む一方で、旧来の価値が棄却されたり新たな価値が創造されるさまも含むだろう。

1.2 調査地と方法

本研究の調査地は、フィジー共和国ナイタシリ県(Naitasiri Province)W村である。筆者は博士論文[Takahashi2005][高橋2008]執筆のため2002年5月から14か月間同村に滞在し、参与観察やインタビューなどによる質的調査を行った。また、2019年3月2日から3月12日、および、2019年8月26日から9月3日にも同村で調査を行った。したがって、2002年と2019年の調査データを経年比較すれば、いわば「定点観測」の方法で、彼らが環境変化に対応してきた具体的過程を描出できる。

ナイタシリ県はフィジーの主島ヴィチレヴ島(Vitilevu)の中央を占める山間地域にある。その村々は、首都のスヴァ(Suva)へのアクセスが困難であるがゆえに、伝統的価値が比較的残存しているといわれる。また筆者は各村人の性向をある程度把握しているため、彼らのハビトゥスの変化を跡付けることも可能である。したがってW村は、長期間の環境変化に対応する「フィジー農村特有の対応過程」を観察するのに適したフィールドの一つであるといえる。

フィジー共和国の面積は18,270 km²であり、四国とほぼ同じである。人口は約89万人(2017年)であり、2007年の人口に占める民族の内訳は、フィジー系(57%)、インド系(38%)、その他(5%)である。観光、砂糖、衣料が三大産業であり、2017年のGDPは50.61億米ドルである²。

調査地の W 村は、スヴァから約 60km、ナイタシリ県内陸の山間地域に位置し、2002 年当時の村の戸数は 28、人口は約 200 人である³。

1.3 概念

本稿では、P.ブルデュー(P.Bourdieu)の「ハビトゥス(habitus)」概念を援用するとともに、R.ファース(R.Firth)が提示した二つの概念、「インカルチュレーション(inculturation)」と「社会組織化(social organisation)」を現代の文脈で再解釈することで、社会変化に対する分析概念としての有効性を示す。

個人には、性格、嗜好、道徳観、審美眼などを含む「性向(disposition)」が備わっている。これは、職業、地位、身分、学歴など、個人を規定している「客観的社会構造」が身体化されて「主観的心的構造」になったものである。この性向は、日々反復される「無意識的慣習行動」と、手段-目的関係に規定される「合目的的行動」双方の志向性を規定する⁴。倫理的性向、美的性向、身体的性向、言語的性向などが体系的に統一され、その行為主体のあらゆる実践を生成する母胎を、ブルデューは「ハビトゥス」と呼んだ⁵。

ある地域社会において個々人が選択する諸実践の型には一定の傾向がみられる。各地域社会にはある種の価値体系が共有されており、ある局面で個々人が生み出す諸実践は、その体系に合致する方向に収斂することになる。実体的あるいは物理的な「領域」ではなく、個々人に共有される価値体系を包含する概念的あるいは社会的な「圏域」のことを、ブルデューは「場(champ)」と定義した⁶。ある場に対する社会経済的インパクトがもたらす環境変化において、「ある局面における妥当な選択は何か」という「場の正統性」⁷を表象する価値体系は、諸実践の相互作用を経て、その場に位置する個々人のあいだで経験的に身体化されている。結果として、変化への対応過程として場にみられる諸実践の型は一定の傾向をもつことになる。

他方、場の正統性という規準があるにせよ、個々人が生み出す諸実践の型が完全に一致することはない。各人の性向と経験から成る「実践感覚(practical sense)」⁸がそれぞれ異なるため、そこには「偏倚」の生まれる余地がある。

かつて、いわゆる未開社会⁹に外来の文物が流入した時の彼らの対応は、「文化変容(acculturation)」という概念の下に扱われた。そこでは文化の優劣が前提とされ、文化的に劣位にある未開社会は優位にある文明に対して、常に受動的対応を示すものとみられていた。しかしファースは「インカルチュレーション」という術語を用いて、この見解を批判した¹⁰。彼の調査地であるティコピア(Tikopia)の事例では、未開社会の側にみられた能動的選好性が紹介されている¹¹。

その過程は、文化変容(acculturation)の一つというよりもむしろ、インカルチュレーション(inculturation)の一つであった。つまりティコピア人は、彼らの孤立的状況の中で、受容してきたものに合わせて自分たちの文化を成形させられるというよりはむしろ

る、受容してきたものを変形させることも可能であったのである [Firth1936: 31]。

本稿では、「未開／文明」という単なる二分法を超えてこの概念を再解釈しつつ、現代の文脈の中に配置する。ある場の「外」からもたらされる社会経済的インパクトと、場の個人がそれを受け止め主体的に対応するインカルチュレーションの過程を観察すれば、そこには差異的な実践の数々がみられるだろう。環境変化は場の正統性を再生産させる。利用可能な資源の内容や構成が変更されるという「乱れ」が生じた時、彼らはそうした客体的状況に対してそれぞれ主体的な判断を行い、意味付けや価値付けを行うのである¹²。

導入されたアイテムを、個人的領域から文化的領域へ書き換えるというこの問題、つまり、それらのアイテムへの価値の割り当てという問題は重要である。それは、個人間の互いに異なる認知という問題を引き起こす。その認知というのはギャップについてであり、文化的装置と彼らを満たす物質の選択におけるギャップである [Firth1936: 34-35]。

本稿ではこのギャップのことを「偏倚」と呼ぶ。「偏倚」は、「革新」をもたらす重要な概念として位置づけられる。これは従来の正統性からの偏差や逸脱を表しているが、必ずしも否定的な意味ではない。利用可能な資源の内容や構成が変化した時、資源の配列に関する「創造的な型」が新たな諸実践に生じる可能性がある。社会経済的行為は、個人の主体的な「目的」と、利用可能な資源に客体的に規定される「手段」との組み合わせの中から、意識的にいずれかを選択することで生成される。行為を構成する連続的な複数の選択は一つの体系をなし、ファースの「社会組織化」が導出される。

組織化は社会過程であり、選ばれた社会的目的に応じて順序通りに行為を配列することである [Firth1961: 36]。

新たな「モノ」や「状況」を伴う環境変化に対して個人が行う選択には差異があり、結果として、場に現出する諸実践の型は多様になる。そこには、新たな資源の創造的配列を伴う「偏倚的实践」が含まれる余地がある¹³。場に生じたある「偏倚的实践」は他者に対する一つの情報となり、他者はそれを模倣したり反発したり、あるいは無視したりするだろう。この「社会的対流(social convection)」¹⁴を介すことで、この新たな型の実践に裁可が与えられることがある。この時「偏倚的实践」は「革新」の機能を帯び、場の正統性は新たな文脈で再生産されることになる¹⁵。

グローバル化が進展する今日、様々な環境変化と地域社会の変容とが議論されている。しかし、地域社会の変容過程は一様ではなく、それらを普遍化することはできない¹⁶。変化を包括的に理解するためには、具体的事象を描出する

ミクロな視点と、それらのある種の統合的概念で整理するマクロな視点の双方が必要である。本稿では、W村でみられた「環境変化に適応できる人／できない人」による諸実践が織りなすいびつな様相をミクロな視点で記述する。同時に、新たな「モノ」や「状況」を彼らが主体的に解釈する「インカルチュレーション」とある個人の「偏倚的实践」が、革新の性格を帯びつつ新たな「社会組織化」へと昇華する過程をマクロな視点で分析する。これらの分析概念の組み合わせに対して理論的有効性が示されれば、変化に対する一農村としての対応過程を包括的に理解する視点が拓かれるだろう。

2. 近代化に伴う長期的環境変化と実践の変化

2.1 近代化の諸相：新たに導入された「モノ」

2002年からの17年間でW村の社会生活は大きく変化したが、その要因の一つは各種インフラ整備である。W村はスヴァから約60キロの山間部にある。行程の大半は1.5車線の未舗装道路であり、2002年当時のスヴァからの所要時間は、乗用車で約2時間、バスで約3～4時間であった。道路インフラは脆弱であり、雨季の洪水や土砂崩れ、橋の水没のため、道路はしばしば通行不能になった。

しかし2019年現在、高速運転が可能な2車線完全舗装の高規格道路がW村の約2km手前まで完成した。村からスヴァまでの所要時間は約半分に短縮され、村人はスヴァへごく気軽に行けるようになった。また、2002年当時にはサービスが無かった携帯電話およびSNSは、現在では広く普及した¹⁷。日常生活におけるささやかなイベントをSNSで知り、村出身都市居住者と村居住者とは相互に行き来している。

17年間のインフラ整備の中で、村の社会生活に最も大きな影響を与えたのは電気の開通であろう。従来は村で電化製品を使用することは不可能であり、家屋の灯りはケロシンランプまたはベンジンランプに限られていた¹⁸。

しかし2004年に電気が開通し¹⁹、すべての家屋に電球が灯るようになった。2002年当時、村人が所有する耐久消費財は、家具などを除けばせいぜいラジオ程度であったが、2019年の調査時には、冷蔵庫(15戸)、洗濯機(11戸)のほか、テレビやDVDプレイヤーなどを所有する村人も多数存在した²⁰。いわば消費熱が起きているといえる²¹。

筆者は2002年にW村で、電化製品についての質問票調査を行ったことがある。「将来、村に電気が通ったら、いかなる利点があると思いますか」という設問に対して、ある村人は、「冷凍庫を購入して村内でアイスを販売したい」と答えていた²²。2002年の時点ではいくつかの例外を除き、村内で行う商売は基本的にタブーであった。他方、2019年のW村では、タブーの緩和や物流事情の改善により、より多くの種類の財が商品として裁可されていた。ただし「冷凍庫を用いた商売」を実施している事例は、現時点では見当たらなかった²³。

女性の家事労働に関わる環境に関しては、電化製品の導入以外にもいくつかの変化がみられた。例えば2002年には、母屋の外に張り出された簡易的スペースが炊事場として使われていた。加熱調理は主に薪で行われ、高価なプロパンガスの調理器具は補助的に用いられるのみであった。薪による加熱では火力が弱いために、強い火力を要する「揚げる」「焼く」などの調理法はあまり選択されなかった。冷蔵庫や冷凍庫がないために、食材や調味料などの保存は基本的に不可能であり、調理されたものはその場ですべて消費される必要があった。

しかし2019年には、母屋に増築されたテラスを炊事場として利用する家屋が多くみられた。従来の土間のような、狭く雑然とした炊事場とは異なり、現在の炊事場には、照明が灯り、清潔で広いスペースがある。調理の効率性は大幅に改善された。薪は現在、強い火力は要しないが長時間加熱が必要な場合、例えばタロ芋(taro)を茹でる場合など、限られたケースでのみ用いられる。通常の加熱調理には、ケロシン式七輪が使用される²⁴。薪に比べて火力が強いこの加熱調理器具の導入によって、調理方法の選択肢が増えた。例えばタロ芋は、従来は茹でる調理がほぼ唯一の選択肢だったが、現在では、揚げるという調理法が加わった。プロパンガスの使用は依然限定的だが、特別な機会には、ケーキやパイ、あるいはパンなどを焼くためにガスオーブンが使われることもある。また、紅茶のためのお湯を沸かす際には、ガスコンロではなく電気式湯沸かしポットが使用される。冷蔵庫や冷凍庫の導入で、食材の保存が可能になった効果は大きい。バターなどの要冷蔵調味料やスヴァで購入した生の魚や肉などの食材が利用可能になり、料理の多様性が増大した。さらに、前日の夕食の残りを翌朝の朝食で食べることも可能になった。換言すれば、薪集めや食事の準備などの家事労働に費やされる時間が大きく軽減した結果、女性の余暇時間が増大した。

2.2 近代化の諸相：新たにもたらされた「状況」

次に、W村の社会生活に新たに出現した「状況」についてみてみよう。

村から2kmほどのところに、公立の小中学校と高校がある。2002年当時の生徒たちは、W村を含む近隣の村々から徒歩で通学していた。しかし現在は、2013年に政府の方針で導入されたスクールトラックが利用可能である。一人当たり片道F¥80が、政府からドライバーへ支払われる。

2002年当時、フィジーの総合大学は「USP (University of South Pacific)」のみであった。しかし2010年に、「FIT (Fiji Institute of Technology)」など6つの専門学校が合併して「FNU (Fiji National University)」が生まれた。2002年の調査時、W村からの大学進学者はゼロであった。村では一般に、教育に対する関心が高いとはいえない。高等教育が良い仕事に結びつくという認識はあるが、経済的事情もあり、実際に行動を起こす村人はほとんどいなかった²⁵。

ところが2019年の調査時は、W村から10人が大学に進学しているという。この事実から、高等教育の重要性を認識する村人は増加しているといえる。

現金獲得手段も大きく変化した。W村は農村であり、村人のほとんどは、タロ芋やキャッサバ(cassava)などの商品作物をスヴァのマーケットで販売することで現金収入を得ていた²⁶。農業を含むすべての社会生活は「マタンガリ(mataqali)」²⁷と呼ばれる社会組織を単位として営まれる。その他、カンティーン(canteen)と呼ばれる小商店を村内に設置してスヴァで購入した財を商品として販売したり²⁸、近くの川で獲れた魚を臨時に販売したりすることはある²⁹。しかしこれらは、収入の基礎をなす生業とはいえない。したがって、近隣の職場に通う、公務員、警察官、病院職員、教員などごく一部の賃金労働者を除けば、すべての家計では、商品作物の販売で現金収入を得る。筆者が滞在していた家では、「筆者の母」が、週に一度泊りがけでスヴァに出向き、マーケットで農産物の販売を行っていた³⁰。

しかしながら 2019 年には、買い付け業者のトラックが毎週木曜日に村へ来るようになっていた。女性たちが満員のバスで重いタロ芋を運搬する手間が省かれた結果、女性の労働時間は大幅に短縮された。

2002 年の W 村では、現金経済の拡がりは限定的であった。彼らが村内で現金を必要とする機会は、税金、学費、交通費、村内の様々な基金、カンティーンでの買い物の支払などに限られていた。

しかし 2019 年には、電気料金(F\$10/week 程度)や携帯電話料金(F\$7/week 程度)などの項目が加わった。フィジーの携帯電話料金は、プリペイド方式が主である。つまり、手元不如意の時は使用を中止し、料金の支払を避けることができるのだ。他方、電気料金は、半永久的に続く定期的支払項目である。電気料金支払の停滞によって貨幣経済の負の側面に直面する村人が将来増えるかもしれない。

以上、近代化に伴う様々な環境変化の内容と、それらに対応する村人たちの実践の諸相についてみてきた。以下では、偏倚的实践とみなされる具体的な事例を詳述する。

2.3 村で起こった事例

① タロ芋

W村における従来の現金獲得手段では、スヴァまでの往復交通費と前後泊の宿泊費、そして重いタロ芋の運搬などが負担であった。したがって「一般的な」多くの村人は、現在の方法が以前より、経済的にも物理的にも優れていると判断している。

しかしこの「状況」に対して、新たな視点をもつ者がいた。筆者のインフォーマントの一人であるモセセは、以下の二つの点で「一般的な」村人たちとは異なる判断を行った。

第一に、タロ芋の「売値」についてである。従来の方法ではタロ芋の売値を自ら決定することができた。マーケットでは多くの女性たちが、タロ芋の盛り方や色合いなどを工夫して自らの商品の売値を決定する。周囲にいる他の売り

手の価格情報や時間帯によっても、その売値を柔軟に変えるだろう。需給バランスを把握する一種の勘によって、利益の幅は増減するだろう。しかし現在の方法では、自分たちに売値の決定権がない。2002年のマーケットでの売値はF\$1.10-1.20/kg程度、2019年の買い付け業者への売値はF\$1.20/kgであり、ほぼ同水準ではある。しかし、17年間では物価上昇も進行している。

第二に、タロ芋の「品種」についてである。W村では一般に、「traditional taro」と呼ばれる従来種のみが栽培され、マーケットで販売されてきた³¹。マーケットの顧客はフィジー人であり、彼らにとってのタロ芋は、国内市場で取引される財に過ぎなかった。

しかしモセセは、この「状況」を活かす着想を得て、偏倚的实践を行った。

彼は、買い付け業者が海外にも販路をもつことに気づき、同時に、「hybrid taro」と呼ばれる輸出向け新種の存在も知った。従来種は収穫まで約9か月かかり、売値はF\$1.20/kgである。一方新種は、収穫まで約6~7か月かかり、売値はF\$3.00-5.00/kgである³²。国内市場では従来種の需要が大きい、海外市場では新種の需要が大きい。タロ芋輸出が盛んな昨今のフィジーにおいて³³、グローバル市場に直結する業者がもつこの情報に、彼は反応した。そして、価格決定権はないものの、より多くの利益を望める新種の栽培を村で初めて実践したのである。

②カンティーン

W村にはもう一人、この「状況」に対して、新たな試みを行う者がいた。筆者のインフォーマントの一人で、筆者が滞在する家の主婦ライサニである。

ライサニは2002年の時点ですでに、村に数人いたカンティーン経営者の一人であった。この家では、彼女の父がタロ芋やキャッサヴァを収穫し、彼女の母がそれらを販売することで現金収入を得ていた。彼女はカンティーンの在庫状況に応じた仕入れリストを母に渡し、スヴァのスーパーマーケットで商品を購入するように毎週頼んでいた。

2019年には、ライサニの両親は亡くなっていた。彼女には夫がおらず、娘の一人は結婚して村を離れ、もう一人の娘は近隣に居住している。彼女は足に持病があり、さらに家には男手がない。現在の彼女の「状況」では、自家消費用のタロ芋やキャッサヴァを栽培するのが精一杯であり、貨幣収入を得るための余剰を生産する余裕はない。他方、彼女はカンティーン経営を今も継続している。1997年頃、お菓子、ヤンゴナ、タバコを商品としてごく小規模なカンティーンを始めた彼女は、2019年現在では、多種多様な商品を大量に扱うようになった³⁴。かつて村に数軒あったカンティーンは、現在ではライサニの店のみである。また、交通手段は改善され、スヴァとの往復は容易になった。「状況」は変わったのだ。そこで彼女の選択した実践の型は十分に偏倚的なものであった。彼女は村で初めて、専業カンティーンで生計を立てるという決断をしたのである。村に給与所得者は数人いるが、商売で生計を立てている家計はない。

彼女は毎週土曜日に、「タロ芋の販売」ではなく「商品の仕入れ」のためにスヴァエへ行く。商品の販売実績と在庫量の記録から入念に割り出した仕入れリストは、過去一週間の売り上げという予算制約線に沿った的確なものであり、大雑把だった 2002 年のリストとは大きく異なる。クレジット販売はフィジーにおけるカンティーン経営破綻の主因とされている。かつて彼女はそれを頑なに拒否していたが³⁵、今ではそのクレジット販売にも柔軟に対処する。ただし、取引内容を帳簿に記載する手間は厭わない。こうした専門カンティーンという形態の出現とその裁可は、村におけるひとつの革新といえよう。

③トラクター

上で登場したモセセは、新種タロ芋の導入以外にも、農業に関する様々な偏倚的实践を行ってきた。しかしその歩みは決して平坦なものではなく、以下のような軌跡を描いてきた³⁶。

モセセは 2019 年現在 45 歳である。1997 年頃まではスヴァエで働いていたが、飲酒と放蕩の限りを尽くし、上司への暴力で解雇された。村に帰っても態度は変わらず、「あの頃は村の笑い者だった」と彼は述懐する。

しかし彼は、「2000 年に《神の声》を聞いた」という。彼はそれを機に改心した。彼は「セブンスデーアドベンチスト (Seventh-day Adventists)」を信仰しているが、一念発起して聖書のリーダーの資格を取った。以来、勤勉かつ無私な態度で慎ましい生活を送っている³⁷。

2003 年頃、モセセは独力で開墾を始めた。彼は自分の農地だけではなく、彼が所属するマタンガリの農地全体³⁸に対しても、新しい種を植えたり、化学肥料を導入するなどの援助を行った。

その結果、2006 年頃には、彼のマタンガリの農地全体で生産性が向上した。この頃には商業的農業 (commercial farming) を明確な目標に定め、村にある他の三つのマタンガリの農業も援助することにした。農業規模の拡大とともに収入が増えていき、2009 年には酪農場で乳牛を飼い始めることになった。今では、村にある四つのマタンガリのうちの二つが酪農場を所有するに至った。

モセセはこの経過をすべて記録していた。ある時村を訪れた政府の役人は、この記録をみて彼の仕事ぶりを評価し、彼に補助金を交付することを決めた³⁹。

2006 年に彼は、F\$55,000 でトラクターを購入した。購入費用のうち、F\$20,000 はモセセとその兄弟の負担、残りの F\$35,000 は政府からの援助だった。W 村でトラクターを保有するのは彼一人である。

ある時、W 村の農地の先にある隣村の知人が、トラクターのレンタルを依頼した。水道設備のない隣村に水道を引く工事を行うので、資材運搬用にトラクターを借りたいという内容だった。モセセはレンタル料を取らず無料で貸すことに決めた。ただし一つだけ条件を出した。それは W 村の農地にも水道を設置

してほしいという要望であり、隣村の知人は快諾した。以来、村から農地まで飲料水をわざわざ持参する必要がなくなった。

2008年にはスヴァに F\$5,000 で家を買った。この家は、自分の親族だけではなく、村全体の目的のために使われるべきであると彼は考えている。現在は、自家用車購入という次の目的のために、毎日勤勉に働いている。

3. 考察と今後の展望

3.1 考察

新たな「モノ」の導入や社会経済的「状況」の変化は、W村の社会生活に大きなインパクトを与えてきた。

かつてのフィジーでは、「マチ／ムラ」の境界が明確であった。2019年現在のフィジーには、行政単位としての2つの市と12の町がある⁴⁰。ここでいう境界は、「行政単位」の物理的境界ではなく、「場」の社会的境界を意味する⁴¹。マチとムラという場にはそれぞれの正統性が共有されている。例えばマチでは貨幣交換が正統とされるが、ムラではケレケレ(*kerekere*)⁴²と呼ばれる一種の互酬的交換が正統とされる。つまり、マチの正統性を身体化させた都市居住者が村で自分の所有物を乞われた場合、彼がもしその対価を相手に要求すれば、それはタブー違反とみなされる。

しかし2019年現在のW村では、「マチ／ムラ」の境界が曖昧化している。交通手段の改善によって都市居住者と村居住者のあいだの物理的交流機会が増えたり、日々の近況を知り得る情報ツールによって相互の心理的交流機会が増えた結果、その隔たりは埋められつつある。マチの正統性を体現した諸実践に接する機会が増えれば、その経験は彼らのハビトゥスに構造化される。

加えて強調すべき点は、W村における階層の変化である。インフラ整備前は、村人それぞれの社会経済的生存条件も所有物に関する物質的状况も、ほぼ画一的であった。しかし現在では、そこに明確な格差が存在する。市場経済に関わる情報が以前よりも過多になり、その取舍選択と解釈とが重要性を帯び始めると、「状況」の判断次第では、社会経済的生存条件に格差が生じる。ケレケレは等価や返礼の義務を内包しない互酬的交換だが、それは、所有物に関する物質的状况が行為者相互でほぼ等しいことを前提にして初めて成立するシステムである。「昨日何かをケレケレされても、今日は自分が別な相手に類似のモノをケレケレする」場面が日常的であるからこそ、このシステムは機能するのである。しかし、社会経済的生存条件や所有物の物質的状况が画一的ではない現在では、ケレケレを気軽に行うことはできない。まさかトラクターをケレケレするわけにはいかないのである。筆者は2002年にW村で、「ケレケレしても良いと思える財／思えない財」をテーマに質問票調査を行ったが、現在の状況で同じ項目を再調査すれば、興味深い結果が出るに違いない⁴³。互換行為がケレケレを基底にしていたからこそ、村内での貨幣交換はタブーだった。しかし現在ではそ

の基底が崩れかけている。村内での商売行為が、以前よりも広く裁可されつつあるのはそのためであろう。

W村では昔も今も、首長を頂点とする伝統的階層が重要な意味をもち、すべての社会生活はこの範囲内で営まれている。2002年当時でも新規の経済階層はその意義を増大させつつあったが、格差はさほど顕在化してはいなかった。しかし2019年現在では、社会経済的生存条件や所有物の物質的状况に関連する経済格差が現前しつつある。そしてそれを推進しているのが、市場経済化という「状況」に対する判断と偏倚的实践である。

「状況」における個々人の対応過程は一様ではない。しかし、その原因となる社会経済的インパクトの内容は、少なくともW村に居住する者にとってはすべて等しい。環境変化はすべての人びとに等しく訪れる。異なるのはそれらに対する個々人の判断と解釈、あるいは実践を具現化させる力能⁴⁴なのである。個々人がそれぞれ、新たな「モノ」や「状況」に主体的に対応する過程はインカルチュレーションとして整理される。他方、手段-目的関係の中で資源を配列する個々人の諸実践の相には差異がみられるが、それらを導くのは彼らの実践感覚である。性向、力能、経験、知識などが構造化された彼らのハビトゥスはそれぞれの実践感覚を発動し、差異的な諸実践を生成している。

女性の家事労働に関わる環境変化によって生まれた、新規調理法や新規食材の導入なども、偏倚的实践のひとつではある。例えばフィジーの多くの家庭では、袋入りインスタントヌードルは、スープヌードルとしての正規の手順ではなく、炒め物やシチューの食材に使うという偏倚的な手順で調理される⁴⁵。正規の手順からの逸脱が、いつ、誰によって、どのような状況でなされたのかは不明である。しかし、インスタントヌードルという外来の文物をめぐるこの偏倚的实践は、今では正統性を獲得している。

以下、モセセとライサニの偏倚的实践を生成した彼らのハビトゥスについて考察する。

モセセの育った環境はさほど特異ではない。彼の父は農業を営み、10人の子どもを育てた。裕福な家庭ではなかったが、父親は教育の重要性を理解していたという。後述するように、モセセは日本への渡航経験があり、子どもたちによくその話をしている。好奇心が旺盛であり、現在の日本について筆者によく質問をする。「すべての始まりは好奇心であり、教育と経験とが自分のやる気を生む」と信じている。モセセの次女は、村で初めてのUSP進学者である。娘が勉学に集中できる環境をつくるため、モセセの妻は2019年9月に村を離れ、スヴァで娘と暮らすことになった。モセセの家には子どもの勉強机がある。村から初のUSP進学者を出すのも、娘の勉学集中という目的のために母親を娘と同居させるのも、家に勉強机を置くのも、W村では異例のことである。しかしモセセの実践感覚は、そうした選択を妥当とみなした。

ハビトゥスには、家庭や学校の教育の中で習得したり、経験の中で体得したりする内容が構造化されている。モセセには特異な経験があった。

彼は政府の青年プロジェクトで「にっぽん丸」に乗り、日本をはじめとする海外へ渡航した経験をもつ。W村の環境で、海外渡航経験をもつ者は稀有である。モセセはその時の経験をこのように語る。

船のキャビンには様々な国の人間が同居していました。異国の暮らしにつきものの困難が起きるたび、互いに助け合って困難を克服してきました。誰か困っている者がいれば皆で助けようとする文化がそこにありました。一般にフィジーでは、もし誰かが豊かになると、他の人間は彼にケレケレでたかります。それでは問題の根本的解決にはならないし、全体の底上げにもなりません。だから私は、皆を助け、皆の地位を上昇させる互助を大切にしたいのです。誰か一人だけではなく、皆が便益を得られるように⁴⁶。

相互扶助の精神は、「マチ／ムラ」という圏域を超えてフィジー社会全体に共通する伝統的価値である。モセセのハビトゥスには、その伝統的価値が生来構造化されていただろう。また同時に、「異国人たちと異国旅行をした経験」や、「牧師としての生活態度に対する反省」も後天的に追補されてきたはずである。つまり、彼のハビトゥスには、青年プロジェクトに応募してみようと思った好奇心、様々な困難を伴う異国生活の中へ進んでいく胆力、困難の解決のカギである互助精神をフィジー伝統の互酬性と融合させた感性、無私で清廉な牧師としての生活態度に現れる反省、等々を含む「力能」と、海外渡航経験を有するまなごしを市場経済の影響下にある農業の現状に向けて得られた「知識」などが構造化されているといえよう。タロ芋の売値の問題に「気づいた」り、新種のタロ芋の栽培を「思いついた」りできたのは、彼が「ワルラス均衡」や「売り手と買い手との情報の非対称性」といった経済学を習得した結果ではない。過去の経験を導いた「力能」と、その経験の蓄積で体得した「知識」とを、彼が文化資本として活用した結果なのである。

また彼は、「たかるケレケレ(消費)」という従来の価値に、「相互扶助のケレケレ(生産)」という新たな意味を付与して、価値の再生産を行った。マタンガリ全体の扶助を行ったり、トラクターの対価に村全体の便益となる水道の設置を求めたりしたのは、「たかり」という利己性を含む従来のムラの正統性からは逸脱した偏倚的实践である。ただし、「消費過程や流通過程からではなく、生産過程からしか価値は生じない」とする経済学の古典的命題に頼るまでもなく、市場原理を内包するマチの正統性の規準に照らせば、彼の实践は十分に合理的である。彼が今後も、彼の諸実践が市場経済で有する意義を体得し続けることができれば、それらは革新として位置づけられるだろう。新たな正統性が社会的対流によって再生産されれば、資源の創造的配列を含む新たな社会組織が今後W村に生まれるかもしれない⁴⁷。市場経済の波が押し寄せるW村には、「状況」にうまく適応できている者もいれば、できていない者もいる。もし市場原理に適合的な社会組織が創出されれば、村人たちがそこで行う諸実践の相互作用を

通じて、「状況」への適応に不可欠な資本主義のハビトゥスを彼らが獲得するきっかけが生まれるかもしれない⁴⁸。

ライサニが育った環境は特異である。彼女は、W村のチーフマタンガリに属している。2002年時点で、彼女の叔父は伝統的階層の第二位であり、彼女の父は第三位であった。従弟の一人はオーストラリアで実業家をしており、叔母は海外渡航経験をもつ開明的な人物であった。2002年の時点で彼女の家には、ソファ、食器棚、ベッド、ガスオーブンなど多数の耐久消費財があり、2019年現在では冷蔵庫を所有している。生活水準は村の上位である。そうしたすべての要素は彼女のハビトゥスに構造化されているはずである。また彼女自身は平均的な主婦であるが、母親譲りの几帳面な性向をもつ⁴⁹。

ライサニはスヴァの専門学校で経理を勉強したが、カンティーン経営を思いついた背景にはこの経験がある。経営学の習得が彼女の文化資本を形成している。

フィジーの村では多くのカンティーンがしばしば経営破綻しているが、上述のように、その主因はクレジット販売にある。村人は概して、大きな額の現金を所持していない。したがって、タバコを買う時も箱単位ではなく本単位であり、燃料など液体物を買う時も量り売りである。しかし、少額の現金さえもっていないこともあり、その際彼らは、クレジット販売を要求する。ゆえに村ではクレジット販売に対する需要が大きい、後日の支払が焦げ付くことも多い。取引記録を付けていないために金額や支払期日が曖昧だったり、顧客や店主が詳細を忘れてしまったりと、破綻の理由は様々である。ライサニは専門学校でこの問題を習ったため、自分のカンティーンではクレジット販売の要請には決して応じないと誓った。2002年時点で彼女は、カンティーン経営を利潤目的のビジネスであると認識しており、破綻リスクを考慮する感覚を有していた。

2019年現在彼女は、クレジット販売を解禁していた。取扱商品の種類と数量は、これまで順次拡大してきた。順調に経営を続行させ、今ではW村での独占状態も勝ち得た。そしてライサニは、村で初めての専業カンティーン経営者になった。

ここに彼女のハビトゥスの特徴と、時々局面に応じた偏倚的実践の相が垣間みえる。

ムラの正統性を構成する相互扶助的精神に照らせば、購入資金がない局面でも客側のクレジット販売要請に応じるという選択は「是」かもしれない。一方、マチの正統性を構成する公正性と公平性、あるいは等価交換の原則に照らせば、不良債権の発生リスクは「非」である。彼女は当初、ムラの正統性に対しては偏倚的であるものの、マチの正統性に対しては適合的な選択を行っていた。

ところがライサニは、方針を転換した。文字通り解釈すれば、従来の方向性を180度回転させ、ムラの正統性に対しては適合的であるものの、マチの正統性に対しては偏倚的な実践へと回帰したように映るかもしれない。近代化の文脈では、これはいわば「退行」である。しかしながら彼女の判断には、習得し

た経営学の知識、長年のカンティーン経営で体得した洞察力、彼女の生来の性向に認められる几帳面さなどが構造化されたハビトゥスと、それを反映させた実践感覚の作用が看取できる。経営破綻の原因はあくまで売上管理の杜撰さにある。自分の管理を徹底しさえすれば問題はないのである。ライサニはいかなる状況でも、帳簿に取引内容を記載することを忘れない。昼寝をしようが、ティータイムを楽しんでしようが、彼女の状況に構うことなく客が訪れる中で、彼女はどんな場合でも必ず記録をつけるのである。他方、クレジット販売は依然として、過少なマネーサプライと過剰な商品需要を反映させたムラの正統性に合致した形態である。彼女のカンティーンは、破綻することなく利潤を生み続けると同時に、村人の支持を受けて繁盛し、結果として村の独占状態を勝ち得た。彼女の実践は、ひとつの革新であるといえよう。

彼女はまた、専門カンティーン経営という選択を行った。この決断の背景にも、的確に状況を判断し先を見通す洞察力があった。彼女を取り巻く「状況」を主体的に解釈する過程はインカルチュレーションといえる。そして、生活という究極の目的を叶えるために、利用可能な資源の組み合わせの中から合目的な手段を見出す必要があった。農村であるW村で、近隣で働くのでもなく、農業で生計を立てるのでもなく、専門カンティーン経営者として生きる決断を行うことは、明らかに偏倚的である。しかし彼女のハビトゥスには、これまでの成功体験が文化資本として蓄積されている。彼女は将来、カンティーン専用の建物を建てたいと考えている。モセセと同じくライサニは、W村が直面する市場経済の荒波にうまく適応できている一人である。彼らの実践感覚は、資本主義のハビトゥスに適合的なのである。彼らの実践が次第に正統性を獲得していく過程をみれば、W村の近代化の真の姿を把握できるかもしれない。

3.2 むすびに代えて

環境変化への対応は、同じW村の個々人の中でもそれぞれ異なる。今後は一層の近代化が進行し、諸実践のいびつな相がさらに現出するだろう。

本文でも触れたように、新たな商品が生まれる可能性がある。かつてみられなかったような「ready-to-eat」の商品が、今ではスヴァのマーケットなどで販売されるようになった⁵⁰。社会経済的生存条件の格差はケレケレに表象される相互扶助の価値を解体し、代わって商品交換が全面化する可能性がある。W村でも「持てる者／持てない者」の差別化が生まれ、例えば、何らかの耐久消費財のレンタルビジネスなどが発生するかもしれない。

女性の余暇時間が増大した結果、女性の意識が変容し、彼女たちの実践に変化がみられる可能性もある。高等教育を希望する女性が増えたり、自立的な生活設計を行う女性が現れるかもしれない。現在のフィジー政府は、女性の人権問題に力を入れている⁵¹。儀礼における女性の伝統的役割や女性が携わる儀礼財の生産などをめぐる実践の変化にも注目する必要があるだろう。

定期的な支払の発生は、未来の不確定な財を合理的に配分するという実践感覚を陶冶する。他方、対応できない人びとを再生産することで、格差が生まれていくだろう。手持ちの現金で現在の収支を考えるのではなく、将来における不確実な収支を考慮に入れる実践感覚は、資本主義のハビトゥスに直結するものである。当然、定期的に収入を得る給与所得者には、この感覚が備わっている。

すでにみたように、近代化に伴い、新たな階層化が進行しつつある。その内容は、社会経済的生存条件や所有物の物質的状況などを前提とする経済的階層だけではなく、新たな商品やビジネス、ジェンダー、資本主義のハビトゥスの身体化などを含む多層的な階層を含むだろう。これらの課題は、引き続き検討していくつもりである。

注

¹ 前者の例としては、2016年にフィジーを襲った「サイクロンウィンストン(Tropical Cyclone Winston)」による被害がある。儀礼財の「ヤンゴナ(yaqona)」の需給バランスが崩れて価格が高騰したことで、消費機会の減少に伴う価値体系の揺らぎが生じた。筆者はこれら二つのインパクトに関する報告を行った(論題:「サイクロンウィンストン」がフィジーの一農村に与えた経済社会的インパクトおよび近代化をめぐる考察—ヤンゴナ共飲儀礼とタロ芋生産に付与された新たな価値とその諸実践—[第55回経済社会学会2019.9.7])。前者の分析は別稿で行う予定である。

² [外務省 HP(2019.8.2 閲覧)]参照。

³ W村の概要とライフスタイルについては[Takahashi2005: 79-127]参照。

⁴ 本稿では両者を併せて「実践」と呼ぶ。

⁵ [ブルデュー1988: 83]参照。

⁶ [ブルデュー1990a: 159-178]参照。

⁷ 筆者は「場の正統性」についてたびたび論じてきた[高橋 2008: 58-59][高橋 2009: 251-257][高橋 2016b: 58-59][高橋 2017: 12-18]。

⁸ ある局面における行為主体の慣習行動を無意識的に導く感覚を「実践感覚」と呼ぶ[Bourdieu1980][Takahashi2005: 46-47]。

⁹ 現在の人類学では、ある種の進化主義を想起させるこの術語は一般的に使用されないが、ここでは前世紀の議論を扱うためにあえて使用する。

¹⁰ 筆者はこの概念の有効性を論じている[Takahashi2000]。

¹¹ ティコピアは、ファースが調査したポリネシアの孤島である。

¹² ファースは、ハリケーン被害後のティコピア島でみられた組織の変化を指摘する。「首長の縄張りや侵されないのは島が良い状態の時だけだ。・・・島がしっかりしていれば、みんなは首長のものを尊敬する。だが、飢饉が来れば、首長のところへ行って、その持ち物をちよろまかすのだ」[Firth1959: 92]。

¹³ 「偏倚的实践」については、[高橋 2016]で詳細に分析している。

¹⁴ [Firth1961: 86]参照。

¹⁵ 「革新」はもともとシュムペーターの概念[シュムペーター1977a: 180-182]だが、経済学の枠外でも適用可能とする議論がある[坂本 1992: 305-306][高橋 2016b: 68-69]。

¹⁶ 地域社会には固有の価値体系が構造化されている[塩田 2010: 87-88]。

¹⁷ 現在では、ほぼすべての村人が携帯電話を使用している。また最もよく使用される SNS サービスはフェイスブックである。

¹⁸ ケロシンは安価だが暗く、ベンジンは明るいが高価である。村には自家発電機の所有者も数名おり、それにつなぐ電球も、儀礼や祝宴などの特別な場合には用いられていた。

¹⁹ 2002年に筆者が滞在していた時、W村の電気工事が進行中であった。

²⁰ W村では2019年3月時点で、2人が自家用車を、1人がトラクターを所有している。

その他には、扇風機やオーディオセット、衛星放送が受信可能な薄型テレビなどを所有す

る村人も少数いる。

²¹ 2002年当時は、家電を扱う小売店の数も商品の種類も少なかった。2019年現在では、都市部の大規模店舗で多種多様な商品が陳列されている。

²² [Takahashi2005: 265]参照。

²³ 2002年に調査したスヴァ近郊の漁村であるN村では、W村に比べると近代化が進んでいた。N村では、冷凍庫を所有する村人が魚の冷凍保存のためのスペースを貸し出す商売を行っていた[Takahashi2005: 134]。

²⁴ このケロシン式七輪は中国製で、村のほとんどの家庭に普及している。

²⁵ 各種奨学金のほとんどは都市居住者によって占められている。県民向け奨学金もあるが、村民の関心は低い。小学校のある教師は、村の多くの生徒が学校から逃げてしまう現状を憂いていた[高橋 2008: 142-143]。

²⁶ 彼らは、主食となるタロ芋やキャッサヴァなどの根菜類のほか、山菜や果物を栽培するが、主食以外は自家消費用である。

²⁷ フィジーの社会生活における基礎的な親族組織。

²⁸ 専用の小屋を設置する場合もあれば、家屋の一角を用いて行う場合もある。都市部で購入され、村でよく消費される財が商品となる。

²⁹ 魚を含む非購入財で商売をすることはタブーとされる[高橋 2017: 7-9]。

³⁰ フィジーでは「セヴセヴ(*sevusevu*)」という儀式を経ると、「あちら側」の文脈にいる異者が「こちら側」である村の文脈に入ることになり、既存の親族関係を基にした社会組織の中に置かれる。筆者は彼女の「息子」として位置づけられた[高橋 2008: 82-84]参照。

³¹ タロ芋には数種類の品種があり、広くオセアニア地域で栽培されている[Pollock2017: 268]。

³² [Fiji Ministry of Agriculture2015b: 43]参照。

³³ 2017年のフィジーにおけるタロ芋収穫量は42,985tであり、世界では20位である[*fact fish HP(2019.10.22 閲覧)*]。また、フィジー農業省の統計では、2016年のタロ芋の輸出量は5,806tであった。ちなみに2016年の農業輸出量は、2015年より大幅に減少したが、これはサイクロンウィンストンの被害による[Fiji Ministry of Agriculture2015a]。

³⁴ 2002年時点での商品は、砂糖や塩などの調味料、缶詰やインスタントヌードルなどの補助的食材、クッキーやチョコ棒などのお菓子、ケロシンやベンゼンなどの燃料、それにタバコやヤンゴーナなどであった。2019年現在では、マッチ、洗濯バサミ、紙おむつなどの日用雑貨も商品として扱う。

³⁵ [高橋 2008: 24]参照。

³⁶ モセセが改心するまでのストーリーは2002年時点での聞き取り[高橋 2008: 19]、農業展開についてのストーリーは2019年3月調査における聞き取りによる。

³⁷ この宗派は酒とヤンゴーナを禁じている。

³⁸ フィジーの村にあるほぼすべての土地は、個人ではなくマタンガリに所属する共有地である。

³⁹ フィジー政府は昨今、タロ芋輸出に注力している。政府の方針もまた、変化を誘導するアクターである。

⁴⁰ 市は、SuvaとLautoka、町は、Ba、Nadi、Lami、Levuka、Nausori、Savusavu、Sigatoka、Tavua、Rakiraki、Navua、Korovou、Nasinuである[Bakker2014: 50-64]。

⁴¹ 本稿では、行政単位としての物理的領域を表す場合は「市」「町」「都市」などの語を使用し、「場」としての社会的圏域を表す場合は「マチ」「ムラ」という表記を使用する。「都市」は「市」と「町」を含むものとする。

⁴² 彼らは欲しいものを気軽にケレケレし、された方は気前よくその求めに応じる。対価は発生せず、それは多くの場合一方的供与になる[高橋 2008: 74-75][高橋 2017: 5-7]。

⁴³ [Takahashi2005: 89]参照。近代化が進行していたN村と近代化が遅れていたW村とでは、ケレケレの許容性にも違いが認められた。

⁴⁴ 偏倚的实践は、不確実な見通し、未知への恐怖、周囲の反発などの困難を伴う。「潮流に逆らって泳ぐようなもの」[シュムペーター1977a: 210-211]と擬えられるその克服には、未来への洞察力、前進する意志、反発に立ち向かう勇敢さなどの力能が行為者に必要とされる[高橋 2016b: 65-70]。

⁴⁵ 広く普及する袋入りインスタントヌードルは「マギーヌードル」である。この調理法は、2002年の時点ですでに普及していた。

⁴⁶ 2019年3月の聞き取りによる。

- 47 例えば「hybrid taro」の栽培は、今では多数の村人が模倣している。
- 48 資本主義のハビトゥスと途上国の近代化については[高橋 2016a: 211-213]参照。
- 49 例えば根元が固い山菜の下ごしらえの際に、その根元をひとつずつ丁寧に割っていく作業を根気強く行ったりする。彼女の母もまた、ゆっくり丁寧に長い時間をかけて「インベ (*ibe*)」と呼ばれるマットを編むなど、非常に几帳面な性格であった。
- 50 茹でたタロ芋や、パック詰めされた弁当など。これらは 2002 年にはまったくみられない商品であった。
- 51 2013 年に発効した新憲法の人権規定[東 2013: 23]参照。

Bibliography

- Bakker, M. L.(2014), *Naitasiri: a profile of the demographic and socio-economic characteristics of the population of the province based on the 1996 and 2007 census data*, Fiji Bureau of Statistics.
- Bourdieu, P.(1977), *Algerie 60*, Éditions de Minuit. (原山哲訳『資本主義のハビトゥス』藤原書店, 1993 年)
- Bourdieu, P.(1979), *La Distinction: critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit. (石井洋二郎訳『ディスタクシオン—社会的判断力批判 I』藤原書店, 1990a 年, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン—社会的判断力批判 II』藤原書店, 1990b 年)
- Bourdieu, P.(1980), *Le sens pratique*, Éditions de Minuit. (今村仁他訳『実践感覚 I』みすず書房, 1988 年、今村仁他訳『実践感覚 II』みすず書房, 1990c 年)
- FBoS(2018), *2017 Population and Housing Census (Release 1): Age, Sex, Geography and Economic Activity*, Fiji Bureau of Statistics.
- FBoS(2019), *INDUSTRIAL PRODUCTION INDEX*, Fiji Bureau of Statistics.
- Fiji Ministry of Agriculture(2015a), *2015 Agriculture Production Flow Chart*, Government of Fiji.
- Fiji Ministry of Agriculture(2015b), *Crop Farmer's Guide*, Government of Fiji.
- Firth, R.(1936), *We, the Tikopia: A Sociological Study of Kinship in Primitive Polynesia*, Beacon Press.
- Firth, R.(1959), *Social Change in Tikopia: Re-study of a Polynesian Community after a Generation*, Allen & Unwin.
- Firth, R.(1961), *Elements of Social Organization*, Watts. (正岡寛司監訳『価値と組織化—社会人類学序説—』早稲田大学出版部, 1978 年)
- Pollock, N. J.(2017), 'Diversification of Foods and their Values: Pacific Foodscapes,' in E. Gnechi-Ruscione and A. Paini (eds.) *Tides of innovation in Oceania: value, materiality and place*: 261-293.
- Takahashi, R.(2000), 'Going beyond inculturation and acculturation: Change, culture and Tikopia society,' in *ER Osaka City University Economic Review* 36(1): 5-70.

- Takahashi, R.(2005), *Habitus and Social Change in Fiji*, Thesis for PhD degree, University of Durham.
- Takahashi, R.(2006), 'An examination of two views about a definition of culture,' in *ER Osaka City University Economic Review* 41: 85-106.
- Toren, C.(1999), *Mind, Materiality and History: Explorations in Fijian Ethnography*, Routledge.
- UNOCHA(2016 Jun13), *TROPICAL CYCLONE WINSTON RESPONSE & FLASH APPEAL FINAL SUMMARY*, UN Office for the Coordination of Humanitarian Affairs.
- ギアツ, C.(2002), 『解釈人類学と反= 反相対主義』小泉潤二編訳、みすず書房。
- 坂本多加雄(1992), 「「企業者」観念の発見と日本の伝統」近代日本研究会編『明治維新の革新と連続：政治・思想状況と社会経済』山川出版社：303-331。
- 塩田真典(2010), 『市場・企業・企業者精神』晃洋書房。
- 高橋玲(2008), 『「場」の慣習行動に見られる相同性－フィジー社会の経済人類学的考察－』大阪市立大学経済学研究科学位論文。
- 高橋玲(2009), 「文化と権力－ブルデュー」中村健吾編著『古典から読み解く社会思想史』ミネルヴァ書房：247-266。
- 高橋玲(2016a), 「怠惰？あるいは、不真面目？－資本主義的ハビトゥスと途上国の近代化」実践社会学研究会編『実践社会学を創る』：208-213。
- 高橋玲(2016b), 「地域社会における偏倚的实践と正統性の変革－R.ファース、J.A.シュムペーター、C.ギアツ、P.ブルデューと経済人類学－」『大阪産業大学経済論集』18(1): 57-79。
- 高橋玲(2017), 「さまようフィジー人－相互扶助組織に現れる諸実践の文化的背景と近代的正統性の模索－」『大阪産業大学経済論集』18(2): 1-22。
- 竹内宏(1981), 『民族と風土の経済学』東洋経済新報社。
- シュムペーター, J. A.(1977a), 『経済発展の理論(上)』塩野谷祐一他訳, 岩波書店。
- シュムペーター, J. A.(1977b), 『経済発展の理論(下)』塩野谷祐一他訳, 岩波書店。
- 東裕(2013), 「フィジー2013年憲法草案の概要について」パシフィックウェイ(141): 18-30。
- 外務省 HP
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/fiji/data.html#section1>
- factfishHP
<http://www.factfish.com/statistic-country/fiji/taro%2C%20production%20quantity>

高橋 玲 (たかはし りょう) 東京通信大学 情報マネジメント学部 准教授